

特別陳列 畠田和一貝類コレクション展 4 畠田和一が採集していた岡山県の絶滅種 3

2021 年 4 月 10 日（土）～9 月 26 日（日）

湾口部または外洋を主な棲息環境とする種

展示する種 (13 種) : ヒナシタダミ, ダンベイキサゴ, チグサカニモリ, コハナマツムシ, コホラダマシ, キンチャクガイ, ユキノアシタ, ヒシガイ, サギガイ, ズングリアゲマキ, シラオガイ, サツマアカガイ, ワスレガイ。

これらの種が岡山県から消え去った要因は、陸域からの汚水による水質悪化と考えられる。高度経済成長期に全国で問題となった公害の典型である。急激に増殖した工業地帯や都市から河川や海へ、大量の排水が規制もなく垂れ流され、富栄養化が過度に生じたのみならず、本来ならば自然界に存在しない物質も多く排出されてしまった。特に岡山・香川両県に挟まれた備讃海域は瀬戸内海の中でも東西の湾口から最も遠い奥部に位置するため、本来的に海水の交換が少なく、事実上の閉鎖水域である。そこへ汚水を急速かつ大量に流し込んだ結果、有害物質はいつまでも薄まらず濃度は高まる一方で、その場に棲む在来底生生物の大半が致命的な打撃を被ったことは想像に難くない。また船底塗料の有機錫に起因するインポセックスもこれら水質汚染被害のうちに含められる。賊腹足類の多くの種がこれに罹患して生殖不能となり、わずかな期間のうちに危機的状況に陥る過程は既に広く知られている。

(岡山大学 福田宏)

ヒナシタダミ

Conotalopia ornata (Sowerby III, 1903)

(腹足綱：古腹足亜綱：ニシキウズ目：ニシキウズ上科：ニシキウズ科)

展示標本： #5629 [笠岡市] 白石島

太平洋側・日本海側ともに西南日本の潮下帯砂底に普通に産する種で、外洋に面した清浄な砂浜に多数の死殻が打ち上げられることが多い。瀬戸内海でも紀伊水道・豊後水道それぞれの北端部周辺では稀ではない。モミジガイ類などの海星類が好んで捕食し、その消化管から採集されることがある。

そのような普通種である本種も、岡山県ではここに展示した「[笠岡市] 白石島」産 1 個体が唯一の産出の証拠であり、それ以外に信頼に足る産出記録はない。他県ではレッドリストにふさわしくない種であるが、岡山県では既に絶滅した可能性が高い。

汚水の流入による富栄養化や赤潮の頻発、海底の砂の過剰採取による陥没と貧酸素化などが、かつて県内に存在していた本種の個体群に致命的な打撃を与えたものと推察される。本種は前回展示したイワカワチグサと同様、分布域が温帯域に限られており、しかも分散能力はイワカワチグサより一層低いと考えられるため、個体群が一旦壊滅してしまった岡山県では、近隣海域からの新規加入による復活は望むべくもない。



ダンベイキサゴ

Umbonium giganteum (Lesson, 1831)

(腹足綱：古腹足亜綱：ニシキウズ目：ニシキウズ上科：ニシキウズ科)

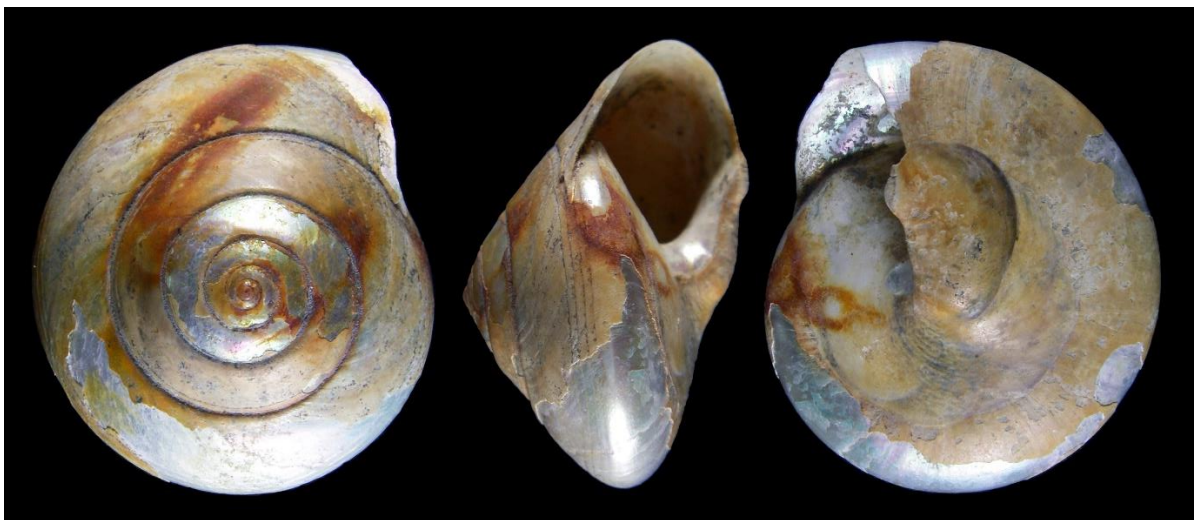
展示標本： #127 [瀬戸内市] 牛窓町

鹿島灘及び男鹿半島から九州南部に分布するとされるが、産地は不連続的で局限され、特に日本海や瀬戸内海では少ない。外洋に面した大規模な砂浜が主な棲息環境であり、千葉県九十九里浜などが代表的な産地である。潮間帯にはほとんど見られず、潮下帯（水深 5–30 m）の砂底に潜る。場所によっては高密度で出現し、外房・相模湾・駿河湾・浜名湖などでは食用として漁獲され「ながらみ」の名で知られている。

対照的に、瀬戸内海では全域を通じて少なく、殊に岡山県での記録は今日までにわずか 2 例しか知られていない。一つはキサゴと同様、明治時代の旧東京帝室博物館コレクションに「備前」産の本種が含まれていたことが記録に残されているが、現在この標本は行方不明である。もう一つはここに展示した「[瀬戸内市] 牛窓町」産の、殻表の磨滅が激しい死殻 1 個体が現存している。

その後は県内での本種の産出記録や標本は一切知られていない。それどころか、現在の一様で単調な岡山県海産貝類相や海岸環境を前提に考えると、本種のような瀬戸内海中央部に似つかわしくない外洋性の種は、過去の県内のどこにどのように棲息していたのか想像することすら困難なほどである。同様の例は鹿島灘や遠州灘などで本種とともに見られることが多いワスレガイで、この種もやはり畠田コレクション中に「牛窓」産標本が現存するが、その後一切岡山県では確認されていない。

これらの標本から、高度経済成長期より前（1950 年代以前）の瀬戸内市牛窓町周辺には、主として太平洋岸に産する外洋性種も棲息可能な環境が小規模ながら存在していたものの、その後の人為的攪乱によって跡形もなく消滅し、県内の生物多様性を構成していた特異で貴重な一要素が失われたとみることができる。



チグサカニモリ

Plesiotrochus acutangulus (Yokoyama, 1924)

(腹足綱：新生腹足亜綱：吸腔区：エンマノツノガイ形亜区：エンマノツノガイ上科：チグサカニモリ科)

展示標本： #283 [笠岡市] 白石島

房総半島／佐渡島以南，小笠原諸島，沖縄島，朝鮮半島，台湾などに分布する。潮間帯下部から潮下帯にかけて岩礁の海藻上に棲息するとされるが，どの地方でも決して普通種ではない。瀬戸内海では全域に普通に産するとされてきたものの，実際に生貝を目にする機会はほとんどなく，近年は広島県芸南地方で死殻が報告された程度である。

岡山県ではこれまで文献記録はなく，ここに展示した「[笠岡市] 白石島」産 1 個体（「矢倉 [和三郎] 氏同定」）及び「[倉敷市下津井] 六口島」産 1 個体（「波部 [忠重] 氏同定 1957.6.」，#4208）の 2 ロットだけが本県での産出の証拠である。両個体とも標本の状態から判断して，砂浜へ打ち上げられた死殻であったとみられるが，現在の岡山県で浜辺を歩いても本種の殻が拾えるとはとても想像できない。高度経済成長期の水質の悪化などによって岩礁藻場の生物多様性が著しく低下し，本種の個体群もその時代に壊滅したものと考えられる。



コハナマツムシ

Aesopus japonicus Gould, 1860

(腹足綱：新生腹足亜綱：吸腔区：賊腹足上目：新腹足目：エゾバイ上科：タモトガイ科)

展示標本： #4144 備中〔笠岡市〕白石島

最北の記録は太平洋側が千葉県南房総市白浜町，日本海側が男鹿半島であるが，報告例の極めて少ない種であり，具体的な産地は山形県鼠ヶ関，相模湾，神奈川県横須賀市長沢，八丈島，愛知県三河一色，三重県伊勢湾答志島，和歌山県，瀬戸内海備讃瀬戸と安芸灘，香川県，高知県沖ノ島，長崎県西海市大瀬戸町，鹿児島県屋久島屋久町栗生，奄美大島，沖縄県，小笠原諸島，台湾などが知られている程度である。

潮間帯下部から潮下帯（水深約 20 m）の岩礁に棲むとされるが，生貝の記録が少ないので棲息状況の詳細は明らかでない。伊勢湾答志島ではキス網で採集されている。近年の瀬戸内海では，香川県の浚渫砂から報告があるのみで，同県の沿岸では「ほとんど見られない」種の一つとされている。

岡山県でも文献記録はなく，ここに展示した「備中〔笠岡市〕白石島」産 1 個体（「黒田〔徳米〕氏同定品」）が唯一の産出の証拠である。殻の状態から判断して恐らく浜辺に打ち上げられた死殻とみられ，殻口外唇が大きく破損し，殻表も多少摩滅しているものの，褪色はさほど見られず胎殻も残っており，採集された時点で死後長時間が経過していたとは思われない。

このため当時は白石島附近に棲息していたと考えられるが，その後は県内全体でも一切本種は見出されておらず，2018 年 7 月に白石島で実施された調査の際にも全く確認できなかった。本種に限らず畠田和一は白石島で多様な種を得て標本を遺しているが，その大半はもはや見ることができず，1960 年代以降に激減または完全に消滅したとみるほかない。



コホラダマシ

Pollia subrubiginosa (E.A. Smith, 1879)

(腹足綱：新生腹足亜綱：吸腔区：賊腹足上目：新腹足目：エゾバイ上科：ベッコウバイ科)

展示標本： #2475 備前〔倉敷市下津井〕六口島

太平洋側は房総半島以南，日本海側は男鹿半島以南，九州までと小笠原諸島，及び朝鮮半島（済州島を含む）から記録がある。日本～朝鮮半島南部の温帯域に固有な種と考えられる。主に外洋に面した海岸において潮間帯下部～潮下帯の岩礁に棲息し，最近の報告では海底の洞窟内部など，光の届かない場所で多く見られ，個体数はやや少ないとされる。

瀬戸内海では淡路島に産することが戦前から知られ，広島県倉橋島や山口県大島瀬戸からも記録があるが，全体的に産出例は少なく，特に備後灘・燧灘では稀産とされていた。岡山県では一切の文献記録がなく，ここに展示した「備前〔倉敷市下津井〕六口島」産1個体（「黒田〔徳米〕氏同定品」）が唯一の産出の証拠である。この個体はやや褪色しており，恐らく浜辺へ打ち上げられたか，またはヤドカリが使用していた死殻と推察されるが，極端に古いというほどでもない。ここから，この標本の採集当時には六口島周辺の水島諸島に点在していたであろう，潮通しが良くて海水の透明度が高く，多様な石灰藻などが繁茂する岩礁に本種の個体群が存在していたものとみられる。しかしその後破片すらも一切見出されないのは，畠田標本に多く含まれる県内産の外洋性種と同様で，現在の県内から本種が再発見されそうな兆しはない。コハナマツムシなどと同様，もはや岡山県では絶滅したものと考えられる。



キンチャクガイ

Decatopecten plica (Linnaeus, 1758)

(二枚貝綱：翼形亜綱：イタヤガイ目：イタヤガイ上科：イタヤガイ科)

展示標本： #1501 備前〔現・備前市〕日生町

太平洋側は房総半島以南，日本海側は男鹿半島以南から知られ，南西諸島，朝鮮半島，中国沿岸，台湾，ベトナム，タイ，フィリピン，インドネシア，ニコバル諸島，スリランカ，モルディブ，ペルシャ湾，アデン湾，紅海，レユニオン島，モーリシャス，マダガスカルを含むインド-西太平洋の亜熱帯～熱帯域（ハワイ，ポリネシア，オーストラリアを除く）に広く分布し，モザンビーク～南アフリカまで産する。潮間帯下部から漸深海底（水深約 50 m）までの礫混じりの砂泥底に産し，泥を被った石に足糸で固着して棲息する。瀬戸内海でも大阪湾や周防灘など湾口部では決して少なくないが，中央部ではもともと稀産で，戦前（1930 年代）の広島県因島での記録は「偶存」と解釈されたこともあった。

岡山県でも文献記録はこれまでにないが，畠田和一コレクションにはここに展示した「備前〔現・備前市〕日生町」産の合弁 1 個体が含まれている。この個体は殻高 46 mm に達し，殻色や内面の光沢，靱帯も完全に残された見事な標本で，採集時生貝であったことは明らかである。しかしその後は破片すらも一切確認されていない。岡山県では戦後の高度経済成長期における海岸の乱開発と汚染によって海産貝類の多様性が著しく低下し，その時期に太平洋岸など外洋を主たる棲息環境とするダンベイキサゴ，バテイラ，ワスレガイなどの種群がことごとく絶滅したと考えられるが，本種もその一例に数え上げることが可能であろう。本県内で新たに本種を確認しようとしてももはや絶望的である



ユキノアシタ

Cultellus attenuatus Dunker, 1862

(二枚貝綱：異歯亜綱：不完全歯上目：無面目：マテガイ上科：ナタマメガイ科)

展示標本： #2184 [瀬戸内市] 牛窓 1955 年 8 月 16 日

太平洋側は房総半島，日本海側は長崎県以南に記録があるが，南西諸島からは知られていない。一方で朝鮮半島，中国大陸～ベトナム沿岸に産することが古くから知られている。開放的な外洋の潮下帯（水深およそ 10～100 m）の砂泥底に棲息する。江戸時代には既に存在を認知されていた種で，砂浜に死殻が打ちあげられる様子を見る機会もあったが，近年は全国的に減少傾向にあり，1990 年代半ばの時点で「清澄な渚が全国的に姿を消し，かつて生息が知られていた殆どの場所で最近の記録がない」と指摘されていた。

瀬戸内海では淡路島近海での産出が明治時代以来知られていたが，それ以外ではもともと少なく，特に中央部（備讃瀬戸・水島灘・備後灘・燧灘周辺）では稀な種と認識されてきた。近年は広島県芸南地方で底引によって生貝が得られており，特に呉市下蒲刈島では多産するとされる。このため現在の瀬戸内海でも局所的には個体群が維持されているとみられるが，岡山県では明確な文献記録がなく，ここに展示した「[瀬戸内市] 牛窓」産の合弁 1 個体（「採集者松本幸男」）が唯一の産出の証拠である。この個体は右殻の後端が多少欠けているものの，光沢や色彩はよく保存されており，採集された時は生貝であった可能性が高い。これ以降本種は，岡山県では破片すらも見出されたことがない。この状況はやはり畠田コレクションの中にしか標本が残されておらず，今回展示したダンベイキサゴ，ズングリアゲマキ，ワスレガイなどと同様，1950 年代ごろまでの岡山県が外洋性の種群も棲息可能な場所であったことを示す貴重な証拠である。

当時は近年ほど水質汚染や海底の浚渫による攪乱もなく，海水と底質が清浄な状態に保たれていたためにこれらの種群も近隣他県や太平洋から伝播してきて，県内で個体群を形成できていたと考えられる。その後の極端な環境破壊によって最初に岡山県から姿を消した種群の一つがこれら外洋性種であり，その絶滅によって本県の貝類相はいよいよ単純かつ一様で貧しいものと化してしまった。今後の環境改善いかんでは全く新たな本種の個体群が外部から自然ともたらされる可能性もないとは言えないが，少なくとも現時点では本種が県内に棲息しているとは考えられず，もし将来生貝が見出されたとしても上記畠田標本とは直接の遺伝的な繋がりはないはずであるから，現時点では一旦，絶滅したと考えるのが妥当である。



ヒシガイ

Fragum carinatum (Lynge, 1909)

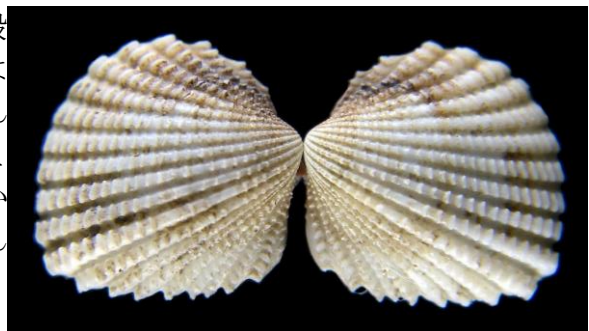
(二枚貝綱：異歯亜綱：不完全歯上目：ザルガイ目：ザルガイ上科：ザルガイ科)

展示標本： #4322 備前本庄村 [倉敷市児島塩生・通生・宇野津附近]

日本は本種の分布の世界的北限で、太平洋側は房総半島以南、日本海側は山口県萩市見島以南に点々と記録があり、九州までと南西諸島、中国大陸沿岸（福建省廈門、広東省、海南島、広西チワン族自治区、台湾など）、タイ湾に分布する。

内湾湾口部など、外洋水の影響を受ける場所の砂干潟下部から潮下帯に棲息する。沖縄県では近年も沖縄島中城湾や石垣島川平湾奥などで生貝が確認され、主として非石灰岩性の砂底に出現する。かつては死殻が各地の砂浜に頻繁に打ち上げられていたが、高度経済成長期以降に急速に減少し、1980年初頭には既に和歌山県田辺湾で「かつては採集されたが現在は全く認められない」と指摘されていた。瀬戸内海西部の大分県姫島や玄界灘の福岡県福間町（現・福津市）でも本種の消滅が報じられ、近年九州以北で生貝が確認されているのは、三重県英虞湾の狭い範囲に限定される。沖縄県での棲息環境も近年甚だしく攪乱され、本種は国内で全体的に強い減少傾向にある。瀬戸内海では古くは広島県の豊田・御調両郡、山口県の柳井市附近などで知られていたが、現在もそれらの海域に棲息しているかどうかは不明である。香川県では2014の調査で仁尾干拓跡干潟から新鮮な死殻が採集されたため、同県にはまだ生き残っている可能性はあるが、その他の産地では磨滅した死殻しか確認できなかったという。

岡山県では文献記録は存在せず、ここに展示した「備前本庄村」産合弁1個体が唯一の産出の証拠である。本種は死亡すると容易に左右の殻が離れてしまうので、打ち上げ採集などで得られる死殻はほぼ全てが半片であるが、畠田標本は完全な合弁で、光沢も残っているため採集時は生貝であったと推測される。採集年月日はラベルに記されていないが、本庄村は1948年4月1日に他の3町と合併して児島市となり消滅したためそれ以前に採集されたものと考えられる。その周辺は高梁川河口の左岸に相当し、かつては遠浅の砂浜が広がっていたらしいが、戦後はコンビナートの立ち並ぶ工業地帯として大規模な埋め立てが行われるなど海岸線が徹底的に改変された。現在当地に赴いても往時の光景を想起させる手がかりはほとんど残されておらず、かつてそこに本種が棲息していたなど想像もできない。本種は潮間帯を含む浅所に棲息環境の中心をもつため、個体群が存続していれば少なくとも死殻が得られるはずであるが、岡山県では過去50年以上破片1個すらも見出されないことと、棲息可能な環境自体がことごとく破壊されて失われたことから、本県で完全に絶滅したと考えられる。



サギガイ

Rexithaerus sector (Oyama, 1950)

(二枚貝綱：異歯亜綱：不完全歯上目：ザルガイ目：ニッコウガイ上科：ニッコウガイ科)

展示標本： #2172 備前〔現・玉野市〕山田村

青森県陸奥湾以南の本州のほぼ全域～九州に分布し、国外は朝鮮半島、中国から知られる。外洋の比較的波穏やかな場所、もしくは潮通しの良い内湾の潮間帯下部～潮下帯（水深約 30 m まで）において細砂底に棲息する。1970 年代前半ごろまでは各地の砂浜に新鮮な合弁死殻が多数打ち上げられ、ごく普通に見られる種であったが、近年は国内の分布域全体で減少傾向が著しい。

代表的な多産地の一つであった瀬戸内海でも、現在は干潟で生貝が確認できる場所は皆無となり、死殻を目にする頻度すらめっきり減った。2009～2013 年の香川県での調査では少数の死殻が得られたのみと報告されている。岡山県では 1968 年に倉敷市玉島黒崎の沙美海岸で採集したとの記録が残されているほか、ここに展示した「備前〔現・玉野市〕山田村」産の半片 1 個が現存する。ところがそれ以降は現在に至るまで、本県では破片 1 個たりとも確認されていない。このため現時点では畠田標本の半片 1 個だけが、岡山県での本種の産出を確実に証拠立てる唯一の貴重な標本となってしまっている。本種は本来なら浅海に多産し、浜辺に多くの合弁死殻が打ち上げられるはずであるが、それが一切見られなくなったのはもはや県内から完全に滅び去ったことの反映と考えられる。シラオガイやハマグリなどと同様に清浄な細砂底に特異的な種であり、おそらく水質悪化（汚水流入や赤潮の頻発など）に弱く、それらが長期にわたって発生し続けた 1960～80 年代に県内の個体群は一掃されたと推測される。むろん水質汚染だけでなく、海岸の埋め立てや干拓、海底の砂の浚渫も本種に致命的な打撃を与えたことは想像に難くない。



ズングリアゲマキ

Azorinus abbreviatus (Gould, 1861)

(二枚貝綱：異歯亜綱：不完全歯上目：ザルガイ目：ニッコウガイ上科：キヌタアゲマキ科)

展示標本： #4281 備中黒崎村〔現・倉敷市玉島黒崎〕

太平洋側は岩手県大槌湾，日本海側は男鹿半島以南に知られ，九州までと朝鮮半島，中国大陸南部沿岸（特に Beibu Gulf）～台湾，フィリピン，インド洋のパキスタン沿岸まで分布する。潮下帯（水深およそ 10～50 m）の砂泥底に棲息する。主に太平洋など開放的な外洋に見られる種で，瀬戸内海ではもともと少産であり生貝を目にする機会は滅多にない。近年の広島県芸南地方では底引網で死殻のみが得られる（ただし「殻皮つきの両殻がよく採れる」という）との報告がある。

岡山県での文献記録は皆無であるが，畠田コレクションにはここに展示した「備中黒崎村」産の，採集時は生貝であったと推測される合弁 1 個体が含まれており，かつては確かに本県にも棲息していたことがわかる。この個体はやはり畠田標本の中にしか残されていないダンベイキサゴ，ユキノアシタ，ワスレガイなどと同様に，1950 年代ごろまでの岡山県が外洋性の種群も棲息可能な場所であったことを示す貴重な証拠である。それら外洋性種群は高度経済成長期の海岸改変と汚染，海底浚渫などによって 1990 年代ごろまでにはほぼ完全に県内から消滅したものと考えられ，それらの種は岡山県の海域で短期間のうちに生じた大量絶滅を象徴する存在である。今後環境状態の改善が見込めれば，新たな個体群が生じる可能性も皆無とまでは言えないものの，その場合もかつて県内にみられた個体群との繋がりはないはずであり，ユキノアシタの項で述べたのと同様の理由により，現在の岡山県では絶滅したとみなすのが妥当である。



シラオガイ

Circe undatina (Lamarck, 1818)

(二枚貝綱：異歯亜綱：不完全歯上目：マルスダレガイ目：マルスダレガイ上科：マルスダレガイ科)

展示標本： #1891 [倉敷市] 下津井

太平洋側は房総半島，日本海側は佐渡島以南，ともに九州まで分布し，特に日本海南西部には産地が多い。南西諸島には出現しない。国外は中国沿岸（浙江省南麂島以南）からシンガポールまで分布する。潮通しがよく，水質が良好な内湾の広く平坦な砂干潟中部から潮下帯において，還元的でない細砂底や礫混じりの砂泥底，アマモ場などに棲息する。カバザクラなどニッコウガイ科，あるいはムラサキガイなどシオサザナミ科の種と同所的に産することが多く，それらと同様に水質や底質の富栄養化に弱い。このため戦後の水質悪化や海岸改変に伴う干潟の縮小によって全国的に急減した。

かつての瀬戸内海では全域にごく普通に見られたが，1970年代以降にほとんど見られなくなった。かつて広島県芸南地方では生貝がアマモ場の泥上に殻を横にしてころがっていたが，近年は確認できないとされている。また香川県でも1970年代には多産するとされていたのに対し，近年では生貝および新鮮な死殻は採集されていない。岡山県では1930年代，「小田郡北木島村〔現・笠岡市〕飛島」に暮らす人々が本種を「スルメ」，「児島郡〔現・倉敷市〕下津井町」では「シラカヒ」または「ウキガヒ」という方言で呼んでいたと畠田和一が1935年に記録しており，頻繁に目にする普通種であったことが読み取れる。畠田和一コレクションにはここに展示した「下津井」産（合弁2個体）のほか，「〔瀬戸内市〕牛窓前島」（合弁1個体，#1564），「児島郡〔現・岡山市南区〕小串村」（合弁3個体，#1893）の各標本が現存し，それら全てが採集時は生貝であったとみられる。

しかしその後は1978年刊行の岡山大学理学部附属玉野臨海実験所による目録に登載されただけで，生貝を目にする機会は完全に失われた。もはや著しく摩滅して光沢が消え，チョーク状に白化した化石様の半片がごく稀に見られるのみであり，現在の岡山県内に本種の個体群が維持されていそうな場所を想定するのは困難である。高度経済成長期の水質悪化や，埋め立てや干拓の進行が必然的に招いた干潟や浅海の藻場の消失などにより，もはや本種は岡山県から滅び去ったと考えられる。



サツマアカガイ

Paphia amabilis (Philippi, 1847)

(二枚貝綱：異歯亜綱：不完全歯上目：マルスダレガイ目：マルスダレガイ上科：マルスダレガイ科)

展示標本： #7413 「深砥小学校」1957 年 9 月

太平洋側は房総半島以南，日本海側は男鹿半島以南，沖縄，朝鮮半島，中国福建省・広東省・海南島・台湾，ミャンマーのメルギー諸島，オーストラリアまで分布するとされるが，国外のどこまで本種の分布域が広がっているかはなおも検討の余地がある。国内では太平洋や日本海といった外洋に面した海岸の潮間帯下部から潮下帯の砂底に棲息し，九州西岸の長崎県平戸島などでは潮干狩りで生貝が採れる一方で，相模湾では水深 75 m から生貝が得られた記録がある。内湾で見られることはほとんどなく，岡山県のみならず瀬戸内海全域を通じて信頼できる文献記録はこれまでになかった。しかし畠田和一コレクションには「1957.9.」に「深砥小学校」から譲り受けたとされる県内産の半片 1 個が含まれている（ここに展示した個体）。岡山県での本種の産出は意外であるが，1950 年代までの本県ではダンベイキサゴ，ズングリアゲマキ，ヒシガイ，ユキノアシタ，ワスレガイなど，外洋水の影響の強い海域でなければ産出しがたい種群も採集されていたことが畠田標本から明らかであり，それらの種の顔ぶれと併せて考えれば本種が県内で産したとしても不思議はない。しかし上記の各種はいずれも現在の岡山県では棲息を確認できず，畠田和一が 1965 年に歿したのちに到来した高度経済成長期の埋め立て・干拓・護岸・海底浚渫など乱開発と水質悪化によって，ことごとく絶滅したと考えられる。本種もそれらの諸種と同様，岡山県ではもともと少数で構成されていた個体群が，1960 年代以降に怒濤のごとくなされた人為的環境改変によってひとたまりもなく一掃され，消滅したのであろう。



ワスレガイ

Sunetta menstrualis (Menke, 1843)

(二枚貝綱：異歯亜綱：不完全歯上目：マルスダレガイ目：マルスダレガイ上科：マルスダレガイ科)

展示標本： #1917 備前〔瀬戸内市〕牛窓

従来本種は、日本から東南アジアを経てオーストラリアまで広く分布すると信じられてきたが、これは同属の別種との混同や産地の単純な取り違えに基づくもので、実際には日本本土（北海道～九州）の固有種である。北限の北海道南部と青森県（陸奥湾・下北半島太平洋岸）は他の産地から飛び離れて孤立しており、それ以外では太平洋側は福島県南部、日本海側は福井県を北限とし、ともに九州南部までのさほど広くない範囲に産出が限定される。韓国や中国・台湾等からも記録はあるがそれらは全て別種の誤同定であることが最近の研究（2021 年中に公表予定）で判明した。

外洋に面した長距離に渡る砂浜の潮間帯下部～潮下帯にダンベイキサゴやチョウセンハマグリなどとともに見られることが多く、常磐～外房地方、遠州灘沿岸、宮崎県日南海岸附近などでは現在も少なくないが、それ以外の産地では明らかに減少傾向にある。瀬戸内海では紀伊水道北端部を除いてもともと少なく、特に中央部では近年の確実な産出例は知られていない。岡山県では 1978 年刊行の岡山大学理学部附属玉野臨海実験所による目録に和名が掲載されているのが唯一の文献記録であるが、畠田和一コレクション中にもここに展示した「備前〔瀬戸内市〕牛窓」産の合弁 1 個体が含まれている。この個体は光沢や色彩、靱帯もよく保存された完品で、採集時は生貝であった可能性が高いことから、1960 年代以前には岡山県内にも本種の個体群が確かに存在していたものと推測される。しかし現在の岡山県の海岸環境を見る限り、当時の県内のどこにどのように本種が棲息していたのか、もはや想像することすら困難である。高度経済成長期の環境悪化によって県内の貝類群集の多様性が損なわれた際に、ダンベイキサゴ、ズングリアゲマキ、ユキノアシタ、サツマアカガイなど主に太平洋岸に産する外洋性種ともども、本種も岡山県から完全に絶滅したものと考えられる。

